ひろうれいを強くうつし心ひとつのよりどころ
すべ明てハかるる日れいけをたくめ元と
あつきりそれでハやみよまとりつくき
ハ乃世うけて軒ゝ[illegible]たのうこ
まれ観音乃益世くもつをれふ
ようよ横川れ僧都よ見付れて
小野よもあひ祈を加持て拍氣
乃きを夢れ世よあをくるこハ大
ひそや横川の杖ゑ古き事ハ爰よ
影を見て話ひ今元聖を母侍て
吊ひ受受と思ひ尋ひのまよ歟
心をれく紀卒よ生ゝれきを
ゝと思ハ明つ横川ゝと思ハ明
立横川の杖れあるゝやゝ

初雪

何と初雪ゝ空くなりなを空やゝ
ちるいるをそをもを雪て行者の
あるをもみをて世まふきこあるこ
やの紀てきよきれハこて過れ
雪中よ乃て夢れ空かるとりて
きをそ雪ハ名れ分のくそるる
そやあゝ無魅乃事やゝ現も爰
とそ更におほこ[illegible]斯をゝ地
ろをきふあゝねもくゝ思ひ鶯
きを彩きゆゝ胸の火を焦れく袂
の軌く涙をなゝ今ハ覆をれ
らるこそ書おく文字れ姿あて名の
跡とて懐ゝやくゝそをんやふ跡

鳥花かいこ城出て行まへ其かうち
妙みてく色へさなく雷ゐまへや
て初雷や名つけて新名のはく
なまく〳〵と意路ゐあらね性別
の名と妙ゐゐ人今を思ようひそ
なき人あけさをゐめてひくゐ心城
ひゐて陸奥れ誓ひを新ゐ
ゐゐなく〳〵此島をなゐゐ松樂
岩臺内極となく〳〵ゐ夕雲の
あゐ想を初雷ゐ不熱ゐ名ゐ今
を新ゐも此名れ名ゐ事へあれ
けあゐれと前を集めて一旨ゐち
龍王衣名の跡をゐ〳〵ゐを名へ
ゐよ〳〵衣ゐゐき弔ひの〳〵

心をすめる折ゐふ鬼鐘城なく
聲〳〵ゐ南無阿彌陀仏ゐ如来
あま〳〵見よやみきやれ〳〵
中空の雲を見えゐゐ雲みゐ
あく〳〵さを白妙岩ち行雲の城
をなまて花弁を姫君ゐもひ
ゐもなゐゐきゐ三昧ゐまゐ
衣あれなる氣色ゐふ此念
佛の功力ゐひま七宝仏の功力
ゐひれゐゐち松樂の臺
ゐゐゐ八功德池の汀ゐあひ
名所鷲鷺ゐ住をゐ城なく七
重寶樹の梢ゐ翔をたのを更
ふきをゐ月なゐゆみけ名の

明風をうそぶき、ちりうほとの飛く
ひとちりの名なる飛絮てわ
方を知ぬなりる事を

早男河

昭君

是ハ唐土かうちの里ふ住居する者ていはゆる王嬙王母とて夫婦の者ていの娘昭君と申息女ていを一人おくりをなのき美人ていて帝ていの召出れば寵愛限りなくて然るを細ゆえ胡國へ移されて彼夫婦の者ていの新くゆ由ていて昭君帝ひの寵ふ今なくとて王母ていて私宅へと急いで村焼ひ村荒かるる花の本陰ていて立られ給ふ事なく雪ていて立ぬ雪ていて立る是ハ唐土かうちの里なたくとう王母とて夫婦の者ていなるを

ゆえに賤しき身なれ共美名を影ひ息安ていて昭君とうれと号つ容顔

人を撫でうさされに帝老を召されてのち
明妃と共名は故めて天子にまゐらせおり
はべりけるいとき身なるを妬むと前世
の宿縁おもとやうるはしん 諸人は
中をえらばせて胡国に移る移れば漢
宮萬里に外みて見ぬ方に移れば
思ひ出るこころ地にさそれされば借奉の
官軍も移泊の道を慰む絃管に
を奏でいで馬上琵琶を弾ずるを
こそとよろと回拍を重ねるこりを
彼も今は思ひ出でなほ彼昭君は憂
へく翠の眉を自ひもまやくるこん
糸竹の思ひ乱るる折ふしに風をろ
ろとしを寄せく本陰の塵をそらん

本陰の塵を拂ひん柳の本陰を清めく
心は庭をうくさく庭をたらんとて祖
父は第を元杭を毋をとそれへ
こそや心を昔のうる老の姿もさ鰺
の いとくとへ思へ風はもの源の
紬を袴かるるひをそれ故 たら
よの常の庭をとくをやんうん
恥るや 月も山を増よ入あひの
かねてもうるる夕嵐の 紬をとへ
思へども あれ為ものうるさ
落葉はつもる本陰のやあくこそ
となりぬるん 落葉はつもる本陰
やかちの つもる本陰やあ嵐も塵
となりぬるん 文世中のうきさるれく

心よりかなしきもののみはてしをあくぬ袖の露涙の秋やはてしらん風のちらす
みはうゝ紅葉をそ袖なるやさん涙
の雨の月を影くそれとをそれとも
もあゝて小篠の上に玉あるを
さうに風をなり絶りよ若くゝ種よ
体をそなたをひくあるよ北国案内
なをみくわるゝそ是ハ此
あるゝ任るのみそ作る昭君の国
事をそなたをひるのあるて
きりくゝあるゝ有るされは必
やゝ又ゝんと度事ハ是なる
秋の本陰ゝきるあ夫婦ゝる法
なけき法ゝと不審ゝゝ昭

君胡国くゝりきれ時此柳をゝ
おき秋胡国ゝて空くなるゝハ
此やなきもかをゝとゝ
けるゝやゝ胡国ゝくくなるゝ
ゝんハ柳を枯なり
昭君胡国くゝりさきゝそれを
拒ゝゝ昭君胡国ゝ
ゝゝ申来ゝくゝく寿ゝ
天子をさ名ゝ初めなり
胡国の軍こゝて国の事と朝
かゝ されハなる和睦て其ゝ
ひゝなゝんやゝく美人城一人ハ
ゝくき国絵来ゝ有るゝ
ゝて宣旨ゝ三千人ゝ寵ゝ何をゝ

ゐ方をちゝ、そゝくれ宮女の行跡高位の姿は賢聖に障るよ似を繪まられを駙馬中よ物まとる枝あゝ見り見るを
をゝゝして胡王乃屋よつゝ天下乃軍をちりあんと綸言あゝを注へ
ゝゝくの宮女達是はいりで也
しゝ繪ゝける人をかゝゝひ皆賄賂
を贈りたゝ所絵来のあゝゝり
されゝゝる其姿何ををみも妙
みゝく柳繁風よ嬰よ桃花露をく
ゝそてをれゝゝき姿あり中ゝも昭
君ハ好ゝ方おきみゝみゝく帝ゝ
えなゝゝなりゝそれをたのゝ行ゆく
ゝんゝゝゝゝゝ有ゝ嚬圍よ

ゝけをゝ何のあゝゝ年くゝゝ
さゝゝハ寵を甚ゝとゝをた君あり
ゝゝゝ乃言繁なゝゝも思ゝゝんか
なくゝく昭君を胡國ゝ移よつゝゝ
昭君胡國く遷されゝ謂ハ所をひひめ
ゝおりひゝゝる事のゝ死ゝを鏡よゝ
ゝ昭君のゝけをゝ鏡ゝく帝に
昔もゝれゝゝゝ桃繁を云ゝ仙
女と繁りゝゝゝ仙女ゝゝく
胡ゝゝ桃の花を鏡よゝゝ則仙
女姿ゝゝいゝを注くゝ柳をも鏡
よゝゝく影をゝん
すゝなゝゝゝく見よゝたゝゝ
それのゝゝゝ鏡ゝ憑ゝゝ人ゝ

つるなり姿はまさるばかりぞ
さん庭にうつりし十寸鏡　古郷を鏡
に映しはとけつとこそ掛くあり
それは昔は年を経て花は鏡を
あるかは散りかかるもやすらん思ひは
いかなる久しきも姿を見るやと
さんさんにわりく泣居たる
是は王昭君か幽霊也　扨もわらは
父母わらはかなしさを出でみてきれね
の木かけ泣沈みて給ふささよ　春
夜の朧月夜に身をなして　曇り
あるも影見えん　おそろしや鬼とや
いそく俤の身にもよらぬさても有
むかしみし俤　古き鏡にうつりけるよ

故にさんば　是は胡国の夷呉大将韓耶
将か幽霊なり　胡国の夷をあなたに向ひ
今見るすらん人あつて同じく有けれ
音なきて冥途の鬼を見るとよ　韓
耶将をも寄なくある同じく昭君の
父母の対面の為に来りて　より
あつりきは対面よれ姿を見るも怖
きや　そもおそるべきいれいつま
心よきわれ其姿鏡にうけ見たまく
ぞ　臓に気遠き姿は鏡にようり
くうけ見ぬ鬼とてあり　鏡にある道
理や　おとろ髪は乱れ　髪筋を
生をも恐るなしありすまさりて
たまらぬは　ささなかりける　結ひさげ

五月五日鎖をさけなどは鬼神と見
給へ姿を形へ鏡を寄そひ立く
を居ても鬼をはらひ性人とハ又ハ
女ゆめ〳〵ゆめ〳〵怖しかるべき
顔つきなる面目なくて立ゆる
昭君は感ハ〳〵ハの色なとあ〳〵
羅を引ず涙流やそ袖くまを
ふもあ〳〵ゆと又て曇る日をう
ちの空なる相思ひ影をかの方に
月花〳〵ゆの代の心をはるを
思ふかゆ又ちまを〳〵

鶴祭

又うけ〳〵て君宮ゆ〳〵神の宮
居る年〳〵 抑是ハ當今ゆはく
なる居下あり 抑も熊野紀多の明神
ハ靈地無双の神ゆ〳〵庭ゆ〳〵神ゆの
数〳〵多き中ゆ霜月初午ゆ〳〵祭礼の
儀式君國吕及ひを結ひ色又て年礼
とゆ宣旨を蒙り唯今熊野ゆ下向
仕ハ思ひ立其方ゆを小時雨〳〵
かゆ〳〵ゆみわや荒智山雪若木ゆめの
山越て〳〵ゆ長濱ゆ〳〵ゆ〳〵とゆく
ゆ〳〵を松原ゆ影又て〳〵ゆ〳〵ゆ
なく〳〵ゆ〳〵やゆも〳〵ゆ〳〵急ハ
須ゆ是へゆや熊野ゆ宮ゆ〳〵ゆ作

あるときに中御門の殿より宣旨をくだされて
伊勢の神宮に立より宣旨をくだ
さるゝ時に陰陽師の代安倍
さえて其国ちかくなる心ゆえに名を立波
乃為遠も四人にくだされ多
大国に所々に神所多けれ共
強く所をあつくなる 此神恒
松乃葉の代万代にすゑ
ふるゆるもつる雲に深き恵を
あひ給へ賜き海山の金銀
見るあるいはんん 誰とても
あゝ神恵く海ふる磨に深世
もやたくたけ宮のかとを思
みをはいさみある此神参いく
あり

あるゝ是ある人る書ゝき
事れ作 とあるのるるて
ふてふ何ゆ
是祖みき書れ中ゆ
ゝ女性の所ゆ
宮ひ所ゆ不審ゆ
是八代海里ゆ住女ゆ霜月初ゆの
所参れ儀式 陰陽神祇多ゆ是八取
分おゆを宮ひく是ゆ此ゆ
見訓ゆ事ゆ
所ゆ語ゆ
ものゆ是八当今に住なる所ゆ
今月初ゆ所参礼の儀式 君国民ゆ
也ゆ宮ひ宮見て事れゆ宣旨ゆ
勅使ゆ向ゆ
ゆ 逆れ御心

さて是を有難くこうは云へども神
事は謂安く行難く是れ秘する
ことなれども白地にいかにかくありあり
當國内のかくやうに荒廃をと
まく贅を傾て彼樹をうゑ樹をうゑて
おくりもなくてい新く成る事是
才一の奇特なり　是れ不思議の仏
事なれば如何富貴なるも贅をつ
備へて神のちひ　雲井を翔て越
まくをもかとおいひくて　まて
いそんんかくして　たのもしけよ
うけまくをもかくてけあや神の代
に法をもあれば恵をひとくるあつまらく
や拾當社の致景をたづねて西を

若海漫々たり小島は青山あり、鶴亀
蓬山と名づくひとつは岩屋あり七星を
住乃仙居なり　然るに此神は無位
久しくして利物の用あるなり是
神三乃社壇正一位勲一等氣多大き
智満大菩薩と号し無佛世界度荒
生今世に世能引道すれ習ひと顯ていたり
まして祭るる甚もて神功皇后の勅
を受て干満両顆の名珠を海底に沉め
忽ち新羅百濟の賊を皆ことく
亡して天下安全の国を豊かにけ
り性首寄仁天皇の御宇かとよたを入
杵の神王を奉ると定め此神を勅
請しなりけり　和銅代の帝

延喜式神祇を撰ばれ、神祇官に
贈り位奉られ、崇め祭られたる
ことを神前に奏し、宮殿を造り、
延命の徳を以て二世の願ひを
の影明らかなるべき当宮に恵
こあつまるものなり。

きありとよかるべくはうを誰あれ
うを色神祇を祭り祭り其名
いん光来れ、そハ何をか色きられ
世のよりをもつて有縁の宮殿をもるる
神とやいをんとやくにかハ勅
の使なるハ言葉をかそへそ夕べ
月のひかりと共に紙の玉垣を洗ふ
玉垣内よりひかり諸国ハ神乃

神王と号し、今人世地に降を垂ハ寿
玉殿の神とハ和事あり、則御景
を影して明乃神を別て祭りて勅
使に奉れ榊を屈、其ほ殿に上せ
祭ひまつり廊をひき給へハ御
ある相ぬ在厳榊突として所を祭り
有郷や いるハ寿玉殿に神いさ
たる舞樂を奏し、彼稀人と尉め
ぬまれ人を勅使さハ舞樂をか
さくしやを、結宮乃役をさもむ
使ことを勅の使ことを国よりつけ
思ひ出る 其いとの神祭く安
部乃員任勅使として、萬歳樂
まひ事員乃勅使に出て

を面白や樂しむる夜神樂の
風もかすかに音おとなひも時
いとまの神前に備へる燈の真鳥
も家々にあらはれて飛鳥も
地に落てく神変なりし其形
勢見るに奇特なれ此鳥かも
驚かすく諸人共中をさまらな
あやしみ隨をのりの神前に羽を
なきつるなりと庭にくく
まの神秘もみなら出ひ海
にくきけ度勢に備る結縁に
鳥類の分をてん佛果りこと
きを宣命を含ひきなバ尋
さより彼鳥を抱き海にもひ

て於ち給へ此鳥よりひ羽風を
くに雲井に翔とひめくりく
遠の沖に飛さりぬ空なる如に
和光の神徳変ありこと神徳
をかんをて神もあらせ給へ

僧侶 永

爰の世あれはてゝ[illegible]
る哉[illegible]

是を諸國巡の
僧みくしゐまゝ西國を見に行る
此度思ふ所あり西國巡りをゝこなはん
と[illegible]
夕くれ[illegible]秋[illegible]宿はあまりよろしからぬ
[illegible]
そこにも[illegible]なるしかりく意に
行る是はたゞ芦屋の里を[illegible]
[illegible]行る是ある旅屋に
宿をうゝやとこひ[illegible]
の内に案内[illegible]誰[illegible]
行[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひ宿りのなりにまし　いや見てこそ
きハ苦しくこそ思ひ侍れ　男上　さるにハ宿を乞ひ出でいをとゝ
の業掃ひ　十符のすゝ　男　ものこそ
る松風や深世の夢を見そ　男　ん　拙い
はの世の情そや　雨ハみゝねと此宿
そ一樹のうけやおもへこそ　男　いとゝ
是ある雅さんを見ようと
人を見て　男　是ハいかなる人
こそ　男　是ハ勝数あまれ
こそ　男　いや　尋常の人
はまた名字を乃名乗ら　男　
く所ハ何さこそハ名字を

是こそあの屋の前地頭藤左衛門殿
の乃ゝ母ゝ　男　それハ
ゆゑ　男　
清殿ハ死去の後　伯父乃ゝ
兄の一跡を押領　其男ハ重恩を
ハ　男　
ある　男　重書を
重書を　男　其重書
乃見とゝ　男　名字を
重書をも乃見ようけ　男　何
芦屋の荘七百餘町の所　一ヶ月若
丸を譲ゝ　男　若丸藤左衛門家
後ある　男　此重

書をるゆをちありあるゝ何とて鎖
倉よりゆくさそれはねそ　さんと
さるゝ交ハ人々宮明寺殿さ修り
り浮出みく作なるふ是ぬるの
さるゝ今夜南とゝ話しるる其
報是る元人をこ日うちた世るて
ゆさうすれいるる　是ハ伝そ人々
さるの浮寄ていさるに取引
ゆかく作　ゆまるゝを在する伝
細ゆいくうる屋るる申ゆ　さるる
世りあるくゆさまてたまり作く
さて宮殿ハ鎖そいけるていう
あれなる在而みくいう今日ハ夜遊ひ
乃ようゆ行よ浦くゆ出ていて賀面

く心得ていゆ　是ハ芦屋ハ宮泉
ゆり今日ハ日をうるみゆ行よ海るを
舞ひをゆるゝ所慰まハゆと和ゆ
いた誰うる　あハ瀧よ當つく鼓を被
ハ言の笑るハ何事て多い屋く
牡丹ても汝の言ても　又笛を
図るハ主趣ゆて弟りるく多さる
是みて徐るゆまれみていゆ　何岸の
くゆ　ろハ牡丹ハ是ハ主て　ゆりさる
よのくゆ顕ハれるくいつらハきみを
君と　和と　ゆまと　君と　牡丹さめね
屋ゆるりをさるよのくゆ　ゆるをひ
の由ゆりるひゆ逆ひる寄りるゆ　是西
芦乃出行主ゆていゆ　近ゆ面白き折るれ

八幡宮殿つくり作り給ふ　若野立田
の花をみち〻の文級越路の月雪
雪をもいとる遅日有りてを
たさんやを志ばつる烏江といふ湖を清
て　ゆくさもなくうたて黄帝の
臣下より貨殺といふ王辛有りける
時貨殺庭上乃他出おもてを見れば
きりぎりす秋の声をあるまさむき
嵐に散柳の一葉水にうかびまよ
又蝶といふ虫見も虚空にはちかるる
甚一葉のごとく来たる次第くり
さうてはいやをちるものも柳のをを
吹くる風にさそはれて行ゆくり
秋霧のたちまち蝶のゆくまじ交

そと思ひ孤しをユて為を化
見黄帝見るめさでく烏江を溝
ろまて蚩尤城をくゆ月
時代を治め給ふと一萬八千歳や
ゆ　蚩尤の城はちんの宮を公
みすをと書ふり　抱又天乃法
剣を龍駕と名付なを為を一葉
とい事この時宇宙ちはまり
又君若乃座剣を龍頭鶴首や
ゆもしは代ちりおとまり　於今
舞ちくれ若をいなるをけろ伝
近須切りろう舞てある今ひ
さまくはとといく　共ては舞ちう
てあるる今度八撥らんて回をう

といくらかいろいろくてせいくらい
思ひもよらぬ修行者の様にさ
こちたなるはあらはれて藤永の面目や
無てそれ〳〵はちらつるるは
あきれ果て絵にかきたる様にハ
うつくしき無を指を大おに指
お笠の内に見事さてかあまり
星雲
本より波の波の青くゞもそハ雲
をとゝとゝろ雨雲雷鳴神
とろ〳〵やなみとちハ雨を
ちら〳〵ちらやに小篠の竹乃おと
をハちもいさゝら〳〵
扇をのきれく やあこれこそ
鎌倉に宝明寺実信よ見忘れるら

藤永行逃ハちをはらぬそうとて
こそ海ハあまりるるのかる海ひ
ふ無領月若をハ逐出いの面き
あまのやハとなるまの前代未聞の
無事れわを斬る姿となつく法師
ゆくれる別に細を知をを所
りおいて海ゝとくゝこんある業を
改をんうあるいて月若さそ
ちとハ無念ありつんゝハ家と吉
あをハあ面の荘七百銭町のところ
今日より三ハ月若ハ年領るて
藤永事ハ重科人のことなを
めるなる流罪ハ死罪と行さ
きをもとしく悪ハうみより

さう悦をは思ふく報ぜまほしけれ汝
が知行それは相違有べからずなり
しては地頭をきう所を定めて一家
繁昌なるべしと重ねて下知を下し
給ひ　実ありがたき政道すぐ
なる時の世に出る月若うちも
天にもあまる悦ありて国を賜く
本宅に立帰りて知行のうちも
元のごとく地頭所子繁昌し一族の
栄花きはめ百姓も万民も言ふ
恵みにあふりてきまする此代とぞな
りにける

関寺小町

ワキ僧三人次第　児ヲ

待得て今ぞ秋にあふ星の
手向を急がん　ワキ詞　是は江州関寺の住
侶にて候　扨も此山かげにわら屋をむすふ
ひとり老女の候が哥などよみ候程
まゐるの不審の為児達を伴ひ只
今老女の私宅に急ぎ候ふ
涼風に衰鬢を一時に秋さそふ
秋来七日の夕暮も今やあふらん
ワキ　今日七夕祭りとて糸竹呂律
の音をなして　ワキ　鵲の
通をねらひのいさをく織や
錦の色も薄紅葉を添へて秋草の
露の玉こともちぬる松風も折

かゝの手向なるべし人々ながめ
給ふ所あるべしたゞしく国の体を
知ふかを思ひ先斬る正座作く
あるなる一鉢を得られしとおもふ
ひとしく茶花夕茶屋とかくさまを
を猶つゝなりなり花をあめて
過ぎる国てくまなる将花ふり物
を風る歌ふしく緑衣低り人ふ
る若紀事ふ絵ふ老て鶯の百
囀りの声朱を性昔のふる秋の
なるあるふかるこひやく
いる世業尾み国る花安浦りの
やく人のふ入をを眼子を心ちてく人
安迫付絵ふるもとしく雅ふて序

入ふる是ハ世間寺安住侶ふて
老女安正事ふりなひ歌詠くき
ふるもも寿ふくきふて史をも
ふ出ふて埋木ふ人ふを分とな
ふて花落のほ安ふきふるもあ
を心を種ふて詞の花色香ふ
て虫ハなふる甚風ふえさんやふ
くもをふれふ人の安ふすき結ふの和
まふく人ふもてあふをひ作を疑俊
津安ふふ知ふふく手習ふ人の初
色ともふく作ふ古奇ハ和代ふを
ふまふとふくもふ安の和もふ
まふひまれふふくふと乃心ふ花
かふるけふ人の代やなふてめふ

たゞ此よみおきし故よ難波津の
哥をとらてあそひしよ　ワキ 又安積山乃
歌ハ大君の心をもやハらけし是又
めてたき詠哥なりと　シテ 実よく心ね
路目るも此二首を歌の父母のごとく
ワキ 高き賤しき人をもわかす　シテ 都鄙
遠国の鄙人や　ワキ わきて其たの
唐人までも　シテ 手習ふ人のはしめ
として　ワキ すけるこゝろは　シテ あふミの海の
上 さゞなみや濱の真砂をたとへつくし
よむ言の葉ハよもあらし　青柳のいと
たえぬ松の葉乃ちりうせぬ種ハ心
を思ひをたとひ時移りことさるとも
此哥乃をしあしの鳥の跡もつき

せしや色の詠哥もおほせし　ワキ 古き歌人多
きといへと老女乃作るの　たくひすくな
くそれいはく我せこかくべき宵なり
さゝかにの蜘の振まひ兼てしるしも
是ハ女の哥なれハ　シテ さん候是ハ衣通姫の
御哥まても衣通姫とハ允恭天皇の后
にてまします容も形のめて其風情
衣にとほりし　ワキ さてハ衣通姫の流なり
御学ひなれハ　近代聞えし小野の小町
こそ衣通姫乃流なりとはきゝたまいて
思ひわひぬれハ身をうき草の根を
たえてさそふ水あらハいなんと詠
おりしも是を小町か哥かは　シテ さん候
小町かまだ若かりし文屋康秀か三

河守りなりてくるとて時田舎よ
くさろうもなくさ免ようしてて
ゐをさそひ行ほ讀なるし哥也
忘れくるしをつ物をきけハ源
のかるとしてこ髭ハかりかりさよ
あくつきや今の哥ハ小町うあふ
てハハわう実忘れくれ小町う哥
ひよ　ものかわひわをるれう
たそこうよみるをといひそあこに
なみさるをしこ元色姫なれ
ときさそ元小町なりなる年
月ハかんうつり小町ハ百ようあり
やいそたとひ小町のあうつるる世
いまし世世有ときくこ今うとひ

不審もあくこ男ハ小町うきてそよ
さのをかはをなまひそこ白いや
小町ら人をうやなんてとそ
よみ物をうつろう物ハ世中の
くく人芸心乃花やなんゆるそうやや
ひぬをハ分を澤の根をたてさそ
ぬ水あくハ今もいあんとう根そふ
おろうかうこやつめ花そくふ
たあくぬをむハ人ををぬめて源の
面ふるこをのを男百姿の花をれ
るをたて遠何白露乃名おあんん
男百ぬをや人芸乃てつんを
後をそ今ハ分のよあくきある
年月を送り白を芸秋の家往

霜朱つく葉紫雲の音を嘆
なげ　生命をてゝ限りとなつく
〻槿花一日栄なれど契あるハ
なくあきハてゝふ世中ゝ長何もの
日迄歌くんと詠き事も和ちゝ
いつ迄なのきれさんし紫雲ても
ありけるハ雲乃命なりなるを
のれ〻やちのもし紫雲の身
やゝを思ひ時たるもまつるゝ
なりゆく身のをもて今ハ又初めの老
そ憑敬長けるいのゝハ長泊り梅
まてを瑞瑞をとさう垣ゝ金花を
けり戸ゝハ水晶をつゝねり鸞輿
屠車乃玉衣の色を飾てゝ
の枕つくりまやのちもてハ花乃
錦ゝ褥れ松つゝ有ゝ身ゝ
ゝ今ハちるゝ。ゝ。玉ゝ
庭ゝ関寺乃かねの琴諸
行無常やきくゝ老耳ゝハ蓋も
ゝ遼坂の山風ゝ生滅法乃
理ゝを得ハて死ゝ落葉の
ゝりくハ生ける道てくさ乃戸ゝ
硯をつゝ筆ゝ染てゝ
ゝ書ゝ言の葉もくれくゝ
ゝくゝくゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの奇ゝれハいとゝ老の身乃
ゝを行てゝ死てゝ花女ゝ
ゝ七夕乃手向をひゝ出ゝ花女を

いと老服といひおりしもよりまれいや
く是を昔しかしに昔に手をうに
かを七夕乃織糸竹のよ向茂いく
と、絵くら陽空の小地乃小町う百
年よりあつやあつ乃星合の雲れと
人まれくく神を今八庭元の海
まや痛いや目をあてられぬみさ海
とても今宵八七夕のく手向乃
数も色くこの或八糸行ようけくめく
尽く面の空を見くく踏舞て神て
面白て 星海るなる 吳竹の 舞
年まらてあつやハまれと七夕乃
ぬる夜の数そまくれるをける
あく面乃踏舞芝神やか傳き

く五芝の舞くそ舞うくくう。
是八七夕れ手向乃て八七夜てまてやみ
芝百年八 舞 百年八芝よりくく 胡蝶れ舞 奈
あ八まあ乃くく老本れ芝乃枝 さて神
を乃まれ もすても見よりく
ようく流芝 立ま神も觀く芝貴に芝る
神八あくハくそあく憲のいまれ
去行るく初秋れ夜 早明方れ
関乃鐘 鳥を芝さるよ 告濃る
芝のあ芝濃まるもあく乃 祇乃
杜のくく本くれもよもあくく海
て海るとて枝ま芝てくくと
牟れくくよくくを百れくくと
ぬくくハ小町う果乃名あくくく

錦木

早稲田本

実や河てゝ思ふ山〳〵其通ひ路を尋ねぞ　是八諸国一見の僧みくに作

和歌東国をたゞ行程は唯今思日立

陸奥のたて迄行脚をそやと思ひ

いつくみも心ゝ〳〵と行雲の〳〵

手をそみて夕暮ゝ〳〵も重なる袈裟衣

奥八其方うみちのく岩瀬布ゝ里に

そ是まそりく　蜘蛛の細布をり

くゝ錦木や名をなり絶　陸

奥の信夫をもちすり淫故に乱をあ

みゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

嘶く　壁生茅のいりくさて思ひとゞ

さも衣手の森露おきもをく

寝ぬまして夜半を明してなるのあるめもいうなんぬ海あまやそもいを
紅の名みつ　おまえ　おまえ　事みるな
みくに思ふ人を思ひねの夢うつ
ちゝ　様てう　笑くう　是や　意悪　あ
ひある　いつ　よろ　心　あ　きれと
名なすすのハなるゝ河流まて　おき
月　かれ　くゝ　言や　流まて　妹背の
中の河やきくく　吉野の山ハ　を
そや　名ハ　心乃　変　みちく　の　ふ
芸郡の名みつ　れ　細布の　を　ろ
られ　錦　木乃　千度百夜　徒よ　悔き
彩　なり　名　そ　悔き　彩　あり　名
つきやふ　是なる　市人　を　れ　ハ　ち

婦　ゆ　を　く　女　姓　の　お　ひ　ろ　へ
島の　明　て　織　る　布　と　み　て　な　を　ス
男　芸　お　ひ　ひ　ろ　る　薪　と　思　く　ハ　ら
く　名　彩　を　か　れ　る　本　あ　り　つ　ま　も　く
お　を　ろ　芸　ら　を　掛　あ　り　掛　是　ハ　何　と　ち
な　る　賣　物　み　く　ひ　ら　是　を　細布　と　て
ち　る　け　り　を　な　き　布　な　を　是　を　錦
木　と　て　芸　彩　を　飾　る　本　あ　り　伊　ま　も
く　當　所　の　名　物　あ　り　是　こ　ひ　流　く
言　こ　み　ま　本　細布　の　事　ハ　ま　り　な　ひ
ま　れ　名　掛　な　り　掛　何　な　の　名　掛　て
く　や　ん　こ　て　ひ　経　や　名　ま　の　ま　本
細布　の　其　こ　ひ　を　あ　く　よ　て　逢　ハ　き　を
及　を　せ　ま　ら　ぬ　よ　の　い　る　く　そ　れ　も

げに理り其みちのくの縁ちなむ事ハいう
てゝきゝし見るべき人なき世を
捨人も恋慕のみちに迷ふとぞ此錦
木や細布を売らしめさるゝハ理りなれ
ワキ あら面白や答へかなさて〳〵錦木
細布ハ恋路によせたる謂の有 シテ 中〳〵
あまりや言とせまでとやおく数ハ錦木
を日毎に立てゝ千束までよみまさる
けふの布ハちるをもいとくてさらに
あはぬをもいさね胸あひかたき恋とも
よみてもし 〳〵 てそよ物 名をも
たてゝ逢ぬをたねやよそ音の
錦木ハ立てながらこそ朽にけれ
けふの細布胸あハじとや詠し

細布の旬ともあひし数多く寄相
ろり懐しや言の葉ハ岩代の
松其の葉をもかき夕日けも錦
木乃名とりはいさや知らん
扨〳〵錦木細布の謂ハ如何に 昔
より此所の習ひにて男女の媒には
此かき木を作り女の家の門に立る
下の木あれハいろ〳〵に彩り飾りて
是を錦木といふさる程にあふべき男の
錦木をバ取入あふまじきをバ取入ねバ
或ハ百夜三年迄も立るに依て三
年の日数積るをもつて千束とも
詠り又此山陰に錦塚とて是ぞ三
年迄錦木立たりし者の古墳なれバ

所々数の塚本共に壊よ築籠て是
切錦塚也申伝　さんは無錦塚切
みく高野の拍語ふしてちく
て給りく　おりいくさ八歳く
申さん　せすくいつを給くとく　大海
の老人先ちち彼様人を伴びた
撫布の細を分くくてみて木塚を
いけくて彼園を茅るをのと心して
人のかちひちけくくちくよる道
くその露をは旅よとは南真如
茅那八何くくやもめ仏慶を受布る
秋きをけある茅穂　嵐風れくきれ
家る量て有く典の山茅が落も拍
さしく松樹を修集蘭菊毎を隠

ある孤生なり塚の茅紅葉をあ
て錦墳に見そはいひ捨く塚ちち
るそのなきる夫婦の塚ふ入すけり
きくうて角の東の国もく移まん
この秋風の松葉下部夜もきそく
おり仏事をやなくわくん
いたお僧一樹一河の流をくれも他
生の縁そ世拍をまてや値遇の
あ見ふくく風とりきる茅れ松
茅に茅ちく茅ちあくなちの
仏法聞れあくる縁の仏弟ひれ
二世と量る契りたるもさをを
の日数つる錦本れひるる法
乃値遇の有縁さよいくく安を

かたてゆさんかうろうは姿を出なんみ
き本の　三年ぶるとぬいすれ　姿又
夢のごとひとせ値遇よ今てくる
あれこれ尾花うもとの　ひ芝　流
こうたる塚のまちうよ　野辺を出塚
ひ流きよ　いたくあるとて　ねよ
ねまの　利を肩陪　ろ
うきもきりなう　愧うや
きやかも古塚とみうう　内ハ輝く
灯火の影　なる人家　内
杵　とたてうき本をつて　を
野すす　ひ　見ハ姿や　や
きうう　心の　ひき　姿と
ハひと　定めよ　や　葉年を

世人さめとひ物を姿と　ハ
人こう　絶ひ流　流　れ
夢ありは現なりもやく　む
を野りて　夜すうつまる見を　絵
いくく　昔を頭をさんと夕陰　月
乃夜よ　女ハ塚のうちにひく　秋の
心も細布の　ち物をうてち　塚
あれハ　大名錦本をあくさうな
門を敲けも　ちうう　養ること
ちくく　竊よ　青する　物をうな　ち
抱れる　秋の出　青　内ハ　敲　きう
ちうを　ちうう　ちうう　きをちうう
ちううく　きをちうう　ちううく　侵　織　松
出　巻　つをさせと　停　出の　表　ちうう

かりそめ　おれる　草　野の　千種の
糸の　細布　粗く　こまん　宮や
みちのく　岩手　郡の　習ひ　織り
なる　諺の　世に　類なきまで　拙れ
申つる　怪しき　粗も　昔を
をとれ　お傳の　行ふ　絶して　ある　細布や
錦木　千度　百度を　経るとても
此執心　いかもつきず　見せ　今あひ
かなき　縁よりく　妙なる　一乗　妙典
の　功力を　えんを　懺悔の　姿　宮中
粗も　引ぬ　なり　夫は　錦木を　運び
女　ならに　細布　岩手　強出　音
なく　とて　ならに　かきれも　ひ　内
和　有　そ　ん　ち　れ　初　中　紀

岩手の　戸さし　は　其　あ　み　て　我　は　沈　明
きれ　は　そ　く　や　を　ひ　り　ぬ　去　行　男　百
の　物　を　つ　も　き　く　錦　木　は　な　く　ち　く
さ　れ　ら　岩　よ　埋　を　本　の　人　ち　れ　ぬ　み
あ　ら　ん　て　男　ひ　を　と　あ　る　く　き　よ　錦　木　は
わ　を　た　名　を　た　ち　そ　ひ　く　あ　ら　と　は　洞　も
色　よ　出　を　れ　や　憑　乃　漆　木　た　沈　錦　木　を
讀　し　あ　も　男　ひ　さ　や　撮　の　塔　と　は　き
つ　て　百　夜　を　同　し　あ　ら　ん　と　よ　み
し　た　よ　み　物　を　責　て　は　を　粉　あ　り　ま　し　う
ニ　を　せ　あ　を　と　あ　り　く　て　た　や　ち　ち　く　の
け　み　造　も　年　た　れ　み　岩　錦　木　は　ち　な　ひ
よ　あ　れ　へ　ら　つ　く　よ　和　も　か　る　く　よ　を　を　と
錦　木　と　を　を　た　ち　ぬ　く　き　純　の　源　岩

迎近みもおとやはらえ法つかえ拙いかことを八湯ぬあるるをお疑面や錦糸そ千束まなりぬ今ゝゝ人まゝれぬ。
国のゝちち兄色ゝゝやかこと嬉語
芸面雪をめくゝれ葬れ神ゝか葬れ
神ゝれ舞神まひく奇をゝゝ
を妹背の蝶ゝゝ錦糸織八細布れ
ゝをくゝ夜遊の夢ゝゝ
ゝく有明のゝけ恥ゝやくあ海
ゝやなりゝゝ笑ぬゝゝゝ夢人
あをのゝゝゝゝ錦糸を細布を。
ゝゝゝゝゝ恥ゝなるあゝの
ゝゝ野中色ゝゝゝなりを

谷行

早山決河
是八都今熊野の客僧まて拙ゝ
八拙ゝ初き者を一人持ゝ父
ゝおゝを毎一人不法置ゝ
不便ゝ祈ふ立越ゝ彼客ゝ
をゝを在作ゝゝ此内く案内ゝ
誰まて涙ゝゝ面ゝ出ゝ
何とゝ程寄八見ゝ
作毎八風の心ゝ八不程
ゝゝ何と毎八の風八絶ゝ八今
ゝ葉ゝ参ゝ由八ゝく心得ゝ
ゝゝ師匠八出ゝ此道
ゝく世方八入く八痛ゝ内
只今松蔭作ゝを社ゝて作。

扨風の心地ハ何と申さうぞ。又路入を付
程なく明るの為よ来りて、何と申路
入とはやがて大事と申行と社ありて
く扨松若も申借はう。さんと知らう路
入とはへ羅り捨分入行て初めの
借きうさに道をハ知らんと
扨て申向へ松若来るとて
いた師匠よと何事とてゆうと松若も
路入と申借はうと唯今も毎日の
おそはめく初き者の借きうする通
をハ知らんと共と毎日の風入地を入
万、京異にもよう入事とて毎日の風と
心地を入ハ社行の為よ
扨ハ祈とのあるやさうハ童ねて

毎日る共申はうと又来りて何とて
ようと松若なる路入の借きうするよう
申はうと今を申如く初き者の借きうする通
をなんと共と風の心地の申はうハ行り
の為と申はう扨何とやうき先式ハ申とあ
ようと存と先ハ松若申如く師匠の
申借はう路入さんを社なと申ハ
申分のなるおくれ日ようハ指よのひ
なんと扨松若も松若ようの分をよ
時ようと見ねひまうと露ほとをもを
忘らまと思の心地ようと
松若もひとまうと作く作さるの
みようとも心地とあて申分ようひ
ハ羅行の道を出て毎日現世と行

あん思日立る身なれども　かきくどく
ときたる其の後師匠を母も詠めて出す
我者行の身ぞや涙をもつ遅れ出
なるまじ別なし　さらば師匠のお伴して
疾く疾く帰り給へや　くるしきこころ地
とめても止まる身もなくて急ぐや足曳の
大和路遠き思ひの旅　おもひ立ちけり
ぞて手向けのつまの袖を　持つる
名にしおふ柳の行末も見られぞ
鏡なのこ見ゑくや　面影ん葛城や
たかまの山のみねの雲　晴れぬは親の
思ひ子が名残惜しき涙　いざ来たりし
かくて松若思ひの外に峯入の姿山
伏の頭巾鈴懸　苔の衣　けふ思日

立通野辺乃くたよりなきこころ
さし惟若は信力に馬はあらねども
おりにゆくころかろ宇治の山越
今日甕原泉河　河風寒み千鳥啼
声さささけの夕なきく　みるさけ
見まほしき月あらまほしく　三笠乃山をさ
しるて布留の神杉　過ぎかかる三輪
の山本　籬所は見えく　誰秋落とさて
めげも路のほとちれて　苔衣片敷むる
葛城の露しらやまもありまれく
ワキ　急ぐ程に是はや葛城の室に着き
てにや今夜は此所に逗留するよ
く候　ワキ　先旅くかれくなく
子　いかに師匠に申し　ワキ　何事にて候

道より風の心地するとて、ものもおぼえず、
乃至はさもあらむ事をもかさねつと
ゝく作るまゝに、唯なるゝねぶりの労
をもてゆく程に、若しかゝれば、
先生おはしまして、何事ゝゝいふ、松若殿
風の心地とありけるなるゝとゝいふ
ゝ屋若ゝゝゝ是ゝ只なるゝねぶりの
ゝをもゝゝゝ、松ゝ用ゝゝゝゝゝに
海ゝ作ゝ何事ゝゝゝゝ、松若殿
風の心ちゝゝゝゝゝゝ、先生ゝ
寄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて若ゝゝゝゝゝ作ゝゝゝゝ
ゝゝ在命不定ゝゝゝゝゝゝゝゝ
松何ゝゝゝ、大法のめぐ谷行ゝお

こなひあれゝ先達ゝゝゝゝゝゝゝゝ
其由重ねて先生ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ申ゝ、何事ゝゝゝゝ、松若殿
風乃心地ゝゝゝゝゝゝゝゝ作ゝゝ
見ゝゝゝゝ在命不定ゝゝゝゝゝゝゝ
作病ゝゝゝゝゝ大法ゝ作ゝ谷ゝ
乃行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
作ゝゝ作事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
谷行の仕細松若ゝ申ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
谷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

を捨て分れなるゝ命乃をしんで
たゝ進退きはまつて作ゝる
事をてゝくも此をよく命をす
てんことおしのまれたる物あま
ひとつ心をかけて事ハ毎乃に歎れ生涯
ゝゝ乃きかすしてあまをゝゝうそあ
を他生の縁皆ほろぼそ惜らく
何といひあるゝもなく皆苦楽をれを源
る間の心ゝ無き　嘆かして面ゝ一回を
長無き世のなかひ段を見ハ大法
の冥界私あれ俗を皆行ゝゝ
あひきれ紛ゝ先生も師乃の教ゝ乃
中なるなるといひやるかゝをなく
嘘ゝくを　見もあやなく法

源をかまゝ道なをハ分をもゝゝに
もゝくをあゝゝやと思ゝさくかれ
ゝ事ゝゝ無きかあゝをゝいゝゝ
て無きハ生別離の心なり中ゝ死別
あゝゝゝ絶乃歎きよもあゝ一切有為
の世ハなかひれ夢幻泡影露亦如電
應作如是観乃心をも思ゝ見ゝすや
さゝそけ行者の道をハかあゝゝ大
宅の門を去かれて安かゝ三界ハ
親子恩愛乃歎きを均かゝきゝ
かゝて時刻をゝゝて皆面ゝを
思ゝ見ゝ邪見の剣身をゝゝ心をお
きく彼人を除き答ゝ答ゝ上
を霧乃石瓦あゝ堀をゝゝゝゝる心を

いとめ夢をあけ皆面々に法居なりく
ゐもや夜の明るに成る先達くやしい
ちや取り明て急きに立つく各先
に立つく和尚はあとより立つするまて
是を伴てゆくも先達のにたち
ゆて何とて何の山伏乃立つくき
唯急いてに立つく先達てもに強
く拾り彼者は母のなるもつき
歌も病氣も同事てはいとき
和尚も谷行をおこなひて居りく
に歌きなるてはなるはるいは先達
に立あまるやてゆくはのに歌ふ
るくに立有まき由伝に歌も病
氣を同事先達も谷行をおこ

なひをとりに事てはは何とゆき
先達のに歌きなるては和尚は
年月は行徳をかの為ててく
一祈とは行くは若殿をこひ蘇生さ
をにあをかと存は是は
は此由先達にやきするまてはいる先
達は各はれに歌きなるく
年月は行徳をかの為ててく
一祈とは行をありては若殿をこひ
蘇生さをにあをかと各はれは
事ててきるはるは此山の
山神護擁善神なるは不動明王は
索をけて若殿こひ蘇生さを
さはれてはるを力を合て居りく

拙を師匠の其歌き理を聞て野
を見回れば、こころうら さびしも
年月来を経て、其人不動明王乃
威力 又は山神護摩若神 弥勒
開山役の優婆塞 哀愍納受 た
まひし 仕者の鬼神の伎楽伎女
をつかはすをいかに まて 苦修
錬行し山路をくだりて衆生三毒
の冥闇なる 積功累徳乃床
見るこころ、其如の月かげ
くもるあるなし、や寂寞無
人聲 讀誦此經典我爾示為現清浄
光明身 つくり面 きたりけ
の小童を他ようなる親者行の人

体なれば忽命なるべしと心安
かるべくよ あり有難のことやと
ねんごろにまみえ給へば行者
行者おどろき 行者と見るを
ばくそれよ年のよりまさり老ぬ
く 鬢髪は雪 さもいふ
き山の名高きく役行者
見下 先現を者行の名あり有るれ
ば 其恐やそとより衆生をまて
く 哀愍あまた親こころ仏の慈悲
りくとり今願ばくんまて
仕者乃鬼神名伎楽伎女
集推 伎楽鬼神は飛来り
きく鬼神は飛きりく行者の乃

おのゝしさまつゝく首を傾を作をうきく谷行は飛翔は上を窺る山本碧石わ倒て面拭つゝくなる山切小やゝくと静まりて彼小童をけゝかゝなくいきをの行者のおまくよ来れへ行者八幡悦芝を生なし慈悲の正手を翼をなて宮殿ゝ帰り切なる心を感ずまそして那師面をあゝ絵ひ面を語へ伝来も生に先切拝りくきゝ道を分つ傍り登りや高天の雲霧侍のや富嶽の人乃見ゝそかゝきれ城八浪ゝ岩橋切大海を生てゝくと雲出を渡つゝ失ゝり

ワキ三春清水

八鴻を松ゝ大元のゝ下うけ芝まゝ出来ゝ抑是八龍山院を仕くまる法ゝ和歌ゝ日後法丸世ゝ春ゝ白ゝ趣ゝ沢ゝ来れ八是より為清水ゝ法の入江青葉の仕新山ゝも一見ゝ来れゝ

ゝゝやと春ゝ花の名れ白玉楼八千代ゝ来ゝ弱ゝ来なきや葉のゝ散れ山ゝ青紫の本作ゝけゝて雲海の青葉行なゝ知ゝもゝき夜海や水宮山ゝも来ゝり行ゝ為て往み母海ゝ水宮山ゝ来て世所の人を待水宮の海を渡ゝすゝて

シテ男神 水宮出

春も夏なる山風や花のゆきともあつ
暮らん深谷にこそ松のけや冬
枯もしきも錦おもかん東一花ひとを
ぬき及天下ハされ春秋されとも松ハ
常盤の色をかく緑に深く氷
室山岩谷風をまもしき結て氷の
うる氷まるの面も静に書移ちて寒
光るもを見ぞ此御代の佳調れ三
を直ぞ越て國土豊に栄りやち
とせの山もちら重ねらんぬや氷
室の山岩ふる緑くなるみくさハ
ある家へし岩谷深ハこそ乃ます深冬
の雪を集め結べ室の露岩をしるよ
氷室のしつきちまれなりく（ワキ）めでま

是なる老人ハたつねまゐるの（シテ）こなた
のまゐりてひろ何事にてはや候ぞ（ワキ）これは此
所にしめ結ひものゝやうに候ひぬる様
ともに春夏まで雪氷の消ざる謂を
あらハれへ（シテ）昔ハ秋の後迄にひと
秋の杜かけ下露ありしに此ハ五月の
雲まで夏に衣の袖まてりてされ
から名所の深雪のことしあゆみ
やなかひは絶えるに一人岩花氷
を厳雨り流れたり彼岩中より士
仙家なれば算電紅雪とて菜れ雪あり
氷をくのことしとて氷を供御に
使ハしより氷の兩は供御ハもつし
まいらく作（ワキ）謂をきけハ面白や扨

氷室乃出而くに上代よりを國に
よあまるほどりくにのよのうち
先ハ仁徳天皇ハ皇后國風の
氷室より使ひ氷の地より
又甚ハ山陰の雪も雲を沿つて
なるの風ハまつさき　北山
陰も氷室なりと　又山國より
而をとりて　深谷をさかく
谷風室氣もさとりありて今とも
末代も久氏氷の倍の高日陰の國東
田の氷をひをとさ名ゆなり
宮ゝ谷のゆめくに心を而も本沿ふ陰
乃日影もさ也深谷なきハまた
也も雪氷の消めを又を深りと

いや而よりとりの消ぬゆ氷を
ハ君の威光をなるまに似ると　なく
よつねの雪氷ハ一夜の春も
ゆまを　さを立風をきゆる指
を　されハ　ゆ　ゆ
神のちくもひ氷の氷まるを
くまりの今の風やそらん
ゆとよそれハ夜乃ちに成る春ハ
よ氷ハ消をあるひなりあるやを
る夏國くちやれ春月よ氷まそ
をさをを雪の高氷倍陰のちを
あくハいそかなる雪なんく
氷室の消遠るゆ　ゆく　氷ん
ゆ上うまみを作　を天地人名三

いつも君をいはひまつる山海万
物の出生則天地の恩徳なりけり皇
国にかぎつて帝都をまもらせ給ふなり
仏日光をましく法輪はめくり
輪をまはり　陽徳わけへだてなくして
五穀豊年民時をわかたず四季の内
夏なる暑清ぬ暑さ風やよき
てのち天地もおさまりて万物時にあへるか
かく君の恵の尊くして絶れぬの
北山は清くや諸山の枝もしけき四面
彼面の下に集むる雪の氷室山
ちとも大君御影はいつまでも絶
ることなく世にあらしよろこびの浮世の
おそるなく御調をも奉りて祝

天下には氷の節やはからずとも寄れ披き
家臣ともあつまる神代に於ても
御調を奉る故にや絶えず
こひまつる者はつねのふれたま
ちかきはるかれにゆくものの
すきなきいさる山陰の古年蔵
あらかく降りつもる雪れ去りと積
集めつつ地下水は積みて氷をかさね
雪をとりて待をまね春をくむや
夏山にありねまへいつく氷室の構
しくいふる事をあつけの人をも
ありける氷室守夏衣あれどもさむく
さゆるきしたなりきまかゆる
まや氷の節のくみいさぎよくも

直にあれば姿いとやうなるに、春日
なせるなるべし、そもそも山河のほとり
よりこれを見れば氷の所領なる多は絶
をよ、こゝやこゝの多くなるいな
る事もあるべし、人こゝに去れば
此山ぬし、山神本神の氷室をも
儲て、毎年毎に神事あり
やいひもあるべし、なほ山ぬしに、雲風
あるこゝろこゝに時なれば雲八深ばかり
山河草木枯なくて、氷をもきて
踏塩煙をあつまれと思へば氷室をとりて
庫氷を踏ふんで室のうちにいり
けれど氷室のうちに入るなり 雷声
奉給
雲ひつまくに古鳥蘇の森のそ

ゆくなれ 雲 雷
のひりを天照て氷室のうちに俗山
ぬしのこゝろにかくよりやくさも潔きあ
るの所 ちりてそいとのうけ
よりて 山河を震動 雲
氷 紅葉大
乃氷をいくく氷室の神 沼
てう現まこゝ 谷風 沼
くく 月を輝 氷の
若城をゝを読のとく 清風
を吹こゝいく こけを本原 谷
のたよ 雲八きつき 震八
て岩をもあもさ 石
氷を関付 を

ようひ出る氷室の神風あらたなるや
ひむろもりやかてこれ君のみつぎもの
やく所を治むるも氷のみをさむるなる
も氷の月まうち月の出るさを待なる
氷の物を作らしなへ作るや作るまもなく
と天女の舞の雪をめぐらしたまへを
らきの袂をそなく振るをとめて
なくとぞ氷室の神を
氷を守護し日影を厭ひて雲を
さき清めて花の如くの雪をとけ
雲を清めて山の峰やとも見えた
まく白雪やいて氷室ものを給ふも
宮人に捧げ供御をつくしまれ
うつき物こそめでたけれ

橋弁慶

シテ詞 是ハ西塔の武蔵坊弁慶にて候われ
宿願の子細あるにより北野へ一
七日参籠申して候又今夜も十禅寺
へ参らばやと存じ候 誰かある
トモ 御前に候 シテ 宿願の子細ある間今
夜より十禅寺へ参らうずるにてあるぞ
トモ 今夜の十禅寺参りをハ思召とまり候へ
シテ それハ何とてさやうに申すぞ トモ さん候
昨夜五条の橋を通りて候へハ
年の程十二三ばかりなる若
の小太刀を持て切て廻り候ハさながら
蝶鳥の如くにて候 シテ 何とさ
やうのものあるとや申す トモ 候ん

とそれハ知りそめし手えるかさなを
よせ付ひ　たそひとえくよを付ともも
大勢そへハ付ふに　遂そそ見ハふ
きそそれ　まちくよれハ　日ふも
見ふに　非　意不公儀おおそうく
化生のあるよ色ありをうこうくらと
付きそん　如ひうと云性　是祖のもの
あく　意　考物なるそふ　さあく
今あの十程ちしまアをハ知ひとまをて
花ばくふ　いを　既ふ物を　まきそ
面参程のそうきくみて　ハ叶　考
ふひあよハ物ふ化生のものとたく
きんと　ゆくく程なく　そくく　雪
のきあをふくく風冷くふる夜に

こ、こそ、こそハ待ふそれく　初も生あ
ハ毎の仏ハ知ふ　ハ知なハ　ちふのちて
今宵ちふの名おそと　川波そく
たちおちて　月ハそを待ふと　夕
ほのぎをみけるあ　あく　おそ
そる　秋芝風　面白ハ　きれ
くそそふ　ちふ　秋心　涙ハ　ちを
白波の　夕　秋芝　花の　玉　ハ　ち
橋板を　そふく　や　踏　風
ふ　ふる　夜　通　人　そう　ちふ
なく　先　夜　そう　時　ハ
三塔の　待　ハ　ハ　月　ふる　渚
き　黒華　ハ　ハ　ハ　ハ　大ふ
ちふ　ちる　ふ　ふ　ふ　ハ

さて大長刀真中とつて打かつぎゆらゆら
とく出でたる粧ひいかなる天魔鬼
神なりとも面をむくべきやうあらじ
と我身ながらも頼もしくてぞまま
なり敵のこそさよ川風もはや
更くる夜すがら通る人もなくてと
て待ちにかかつてたてすあひ　シテ　弁慶よく
ども立ちのぼる橋の上にも
あらかねをつくやとみまかしころ
をさけまゐりたる　牛若　あられを見る
よりもきもや嬉しや人来ると薄衣
を引かづき待ちなるよりてたてまはし
シテ　弁慶かれを見付つつ詞をかけんとせ
しがただみれば女の姿なり我は出家の

身なればはばかりて　牛若
これをあざむきて見んと行きちがひさま
に長刀の柄もとをはつたと蹴あぐれば
シテ　すはしれ者よものみせんと　地　長刀やがて
取り八向ひ手よ持なをんと
あちしくいくく持なをんまなみの
隙間を切てかかれば牛若はかがみてさわれ
つつと寄りて踏鳴りけるのけ後ろ
さりくと太刀構へをあちこちつけまゐる
長刀振り上げさりげなく太刀打合せつめ
ひらりひらりとひらりと何とも寄らんと
手え切て牛若よりあしらう見てしかた
そうそれてとり大刀まさしその扇を
合せて秘術を二三向さきりく肝
を消しなりけり　あさましやなあれ

ちらの小性猶をされハとて手をとり
いてそらしたるを七郎ちから抜きにはら
ひくて走りかゝるとうちとられ
けて有る所に直てすそをあけ
そくハ深手にて是もたゝめに中を
ひくゝ首を地にうけ打に跡の大方
打落されぬ力なく成んをそれを
切そくんとすれども侍の方
なりて無慙ハ命代なるめ人うれとて
あるれとそくうたりをるかすや
ほう誰かまんまくいとけるを事多
うてそ行をなけよ海まして来あくを
まをハ　まを　今八何をつゝ九郎ハ
牛若源の　頼朝の　ほうさて

法ハ西塔の武蔵無慙なりとたゝひよ
名をあひくて陳手さん出あま
め人ぜ事ハ山家信を氏も使九さ
ヒよりをれハ来くや地をうや
思ん　なりなり是又三世のお孫れ
たゝめ今ハ信をさをとを奏物
ハくけり居行ろ勢なり無慙を
長刀打ついて九条の所くを事を
きを

日本伝記者未詳

百萬

仏ゐまいりやのそれ道くまいりまいらんの友を尋ねて是ハ如来の御在所なる伝みくしにてこれをわたりいたるとハ申ものなれ人ゐくにハ入ひこ来を勧むよう伝ハ行ゐ者のまれなれハ利松者乃人ゐくゐまりて仏にてこれハ唱唱の大念佛ゐくひなるゐ因を中ゐ大念仏をねまを中さまをこれハ申ゐくあるれ大念佛のゐやさまにて大念佛をきやくに爾なけゐやゐ申ゐ何ゐ仏伝なをあるゐ佛ゐ申ゐ何ゐ仏伝ゐ南無あみだ仏ゐ申ゐ利松者ゐ人ハ面白ゐ月あれゐ雲晴れゐ西ゐゐ申ゐあるゐ

ふやなまうらい恨みは親子なからん
誘ひたのもしき、是ぞ嬉しき
狂ひ乱るる心ら、立直の力となるまま
つまとも住まし
えいまうとうきと、一度は親がまし
乃ちくたの子や、親やなかなかあさる
げにや世々ごとの、親子の道にまとはり
なほ此の闇を晴れやらぬ
朧月の薄曇り、僅かに住める世になほ
三界の首枷かや、牛の車のとこしなへに、何とを
さてこそふらんえいまのさやけ
庭く世なき親子あり、百万が
姿は本よりみだれ髪の荊棘
のかくるまでて、みだれ髪

ろれ、又眉根黒き乱れ髪の姿うら
はし心ぞみだれ、かれと人はいへど
をこそ、狩りの人を見れば親子みれ
ちぎりの衣、肩をぬぎて すすき
まさけ染衣、そらびわすれて肩にかくる
おろされ、幾らもの、られ心
南無釈迦仏と信心をとる
すも我子はあまんぬなり、南無や大聖
釈迦牟尼仏、我子にあはせてたび給へ

子 いかに申すべき事の候

ワキ 何事にて候ぞ

子 是なる物狂をよくよく見候へば、古里の
母にて候、恐れながらよそながら名乗りてたび候へ

ワキ 是は思ひもよらぬ事を
仰られ候ふ人をみて

きりすとをして事をするみち
のり法華の経ばかりをやいくまくの
うめる是なる狂女はわらの国黒ハ
何をの人をしれなれば此のちみて
候 扨何ぢさやうに狂気とあるい
ぢて 夫いきてをあまてくさう
らう程なおひらうれてい さてをも
あるとうのあるをうれうるさう
のうちハ何をも働くうぬ拍れそれ
ひるうるうるれうをのを迎人を面を
さうしをもゐるも狂ぢるめうりやあるど
車をけりの参うそう狂ぢるあそんと
いの狂ぢりうるうるうるうるうるうるうる
信い狂ぢるくそう程寂寞の其中に

をとうるめうりあるちうんうれきんれ
教化られた軽ぢも此ぢ事をかうをを
なるも此何をも羅睺為ぢると何何ハ
狂ぢるあるれの神ぢれや祝ぢるあるれの
神ぢるや百ぢう事をを何くんをや
ぢの事此神 狂ぢの行方狂ぢるなり
うるやぢりぢんまハいりうるるもそう若
ぢあぢ附ぢるぢ左ぢもない 世ハそも
何をの狂をやぢ 半ぢ種陰ぢ陽ぢ
鳥雀校此澤をにありまる 宗紫中
きあう波のようハいりを雪水の分
の絶いをにあうれをの精の霧ぢる
ぢる うをを月を狂ぢ
さうをうるををを中此狂此ハ

花かつ〻ちるもとゝぬあるゝ夢ぬ
涙きあまとなりてく　昨日のまつ
きさ波の　あとれたる紀勢り
なゝ坂や児手柏の二おて　とゝも角
ゆも佐人のなき沼ぬ添ふ油の柵塚
あたる　ひ主なるゝ沼の　なゝ
月のけをゝきあの大ちぬ柳ケ
みゝりのひ方ゝ露の松ぬ
いちも　ゝ　ひ　ぬ
ひ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ
ぬ

天竺震旦共に相三国なれども皆釋
尊出世の御時は仏法と
申すは
[illegible]
[illegible]
[illegible]

富士左衛門

是ハ萩原院ゝ仕まつりなり。世も四位にく七ちの殿上の人ハ。得業國とり。ゝ中まろ。使四ちまろ。兵人。蔵間とりて。みのかさ左衛の尉ゝなりしに。是ハ左ちて。所ゝ。同じく住ちの殿人。寄ちりてゝ。ちなむ。左衛の尉ゝなりて。是ハ所ゝ。ちて所ゝ。ちて。所ゝ事を。同じ。ちまゝ。一人。富士。ひとり。ハ。蔵間。伺まも。面。名。ゝ。左き。歌。ゝ。伺。ゝ。伺。ゝ。の。殿。も。伺。ゝ。ハ。ゝ。伺。ゝ。ゝ。ゝ

富士を討てに行き中ごろとなりなれば富
士の所縁はたえ果てしく森の衣裳を脱ぐくやう
と花は散るよ雪あるいつの不孝の名は残
りてあるハはたゆくやらひく雲の上すれ違ふ
くく富士のいりかを尋ねて是ハ津国住
よりは楽人富士とかたの書やみて侍ら
ばも内裏にて七日の管絃ありハ相手を
より上ぶりときく者ありつまもく人を
ミやこん世富士ハ花ハ散りてあれ月の美しさ
かる月の面ハ雲ハ雲ハ時の涙を明るのね
なる涙ハ流ふ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ
みやこを出る出るの人なるまハ住吉の松ハ
本国より脱ひ出る月落うる山ハ雲ハ
過ぎ去ハ是ハ是ハ八幡よ行ひ神みに結

ぶ夫ハ夫の男なるて況よりやハ男山ハ
ふく吹ふく吹ふく吹ふく多ハ是ハ是ハ
吹ふ吹ふ吹ふ吹ふ吹ふ吹ふ吹ふ吹ふ
いる所ハて富士のいりかを尋ねて
いる所ハ富士ハ富士ハ富士ハ富士ハ
ふ代住吉の楽人ハ富士ハ行方を知ら
ぬ富士ハ富士ハ富士ハ富士ハ富士ハ
くく涙ふく是ハ是ハ扨富士の者ハ何ま
て涙ふく和ふく富士者ハ者ハ者ハ
みふく有ハ有ハ有ハ有ハ有ハ何ま
討ま討ま討ま討ま討ま富士ハ涙ハ討ま
ぬれハくおのひのそ〜ゆめ〜ら
涙ハふれ情なく〜を名たうき
みハと雫とハなりあ絶ハなけた
ぶ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

[illegible]なくなりぬ。[illegible]ハ[illegible]あり。[illegible]
なき人のなりぬるを、かゝみる度に[illegible]
あり。[illegible]をハ是を見て[illegible]
ものらく、今までハゆくゑしれぬ[illegible]人
なりけるかな。田舎ハ老[illegible]おもひ[illegible]
[illegible]ゆゑ[illegible]ものを[illegible]
[illegible]寺島[illegible]月日を[illegible]
[illegible]前を[illegible]
人[illegible]時自[illegible]天[illegible]
[illegible]みくの[illegible]
[illegible]推て[illegible]
似[illegible]
明神[illegible]
[illegible]

[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

はぶの討ち事もあれを殺なさいハ秋
の敵ぞうちて心晴れ感まん あら
為ぞ大の敵 いやねぐん佐佐
男の姿かり云ふ 相の具あまや鳥
塊 怪しきもとをちをあ 殺を苦
埋まんと 組よ彩やとちの琴を
秋の風より冷しや うてやくや
あ佐ぞ人 あ 殺りれ あく あふ
殺を思くハ腹をやくきるる
ハ 引くて心ちをなきれぬ 山見
来ると見てうふれぐ風をと
うと左殺ちぐや 楽 物ぐちち
とハ御と定めく 時恵の焔ハ左殺の
焼火と天ぐあれハ重れ人 まくぐう

ハ あ ち ま れ く ち ぐ
さ ぐ 男 ち ち と 見 て 元
元 さ も し て も 俗人 れ 葬 れ ハ
左殺の役ハとりきぐるれ
ぐ ち や ぐ や 女人
の悪心れ煩悩の重時て 五者乗を
ち殺く 修羅の左殺ハ ち山 ぬ
の御令千年乗ぐ 聖人千世や
影代や民を栄て安穏 太平楽
をぐぐよ 日を光ぐぐ ぬく 山の
猪をあぐ あ ぐ て あ ぐ き 民 葬 れ 手
ぐ れ ぐ や 今 て ハ ぐ ち ち き
ぐ れ ぐ き ぐ や 也 ぐ ん 秋 ハ ぐ ぐ
猪の々ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ 源

[illegible]
くいとゆやてさしなどゆくへもしらぬ
皆ぬき捨て都にかへりてこれをみてを
[illegible]
こちらにかりくはつまのかをみるをとて乃おも
きてそ[illegible]

けり

紅葉狩

時雨を名にて紅葉狩にくるとて山路
を尋ねて　是は此あたりに住まひする
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なるかも面くねくねとみちをわけこんは
砂中たそんと先ほどよりこちらへ
四方の横ばかりあるめく姿体を活かせ
面白やしかも長月せるあまり日方は枯
をとるる物を色とるる夕時雲く
鹿のひとりなく声をきくは物
哀をそそるなるかりこちらへきこゆ
明ねとて野辺よりもいまいまは鹿の
あるはおのれ風のなるを弱内足あを
つもりんかやはをとるかけ心は樣子
くへ壁のすき高くく行方を
遠き山陰はちらちらの石をさかき
る滝なる声すあり風はかり方
を心をよくくめる達ある

前に作りの山陰を見るは常
ちまり屏風をまくさなの酒
あはみきんと見たりをおるて来り
く畳てに寄りてくへ姫さる
とたり作作より進ぜも上
簡のこちはなるものをみち物と
さ酒高はは半あるかくくのり
こちはは馬よりかりて皆
をあきく道をたてて山陰の岩の
けちをとるは心つひそたくひあき
くあるかあるぬ多なるの山の
奥を見てくくをきこちはけく
稽なるはるおをこのをかくを
くちん秋は誰ても白雲はかや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

256
291

著作權所有

明治四拾五年貳月拾五日印刷
明治四拾五年貳月貳拾日發行

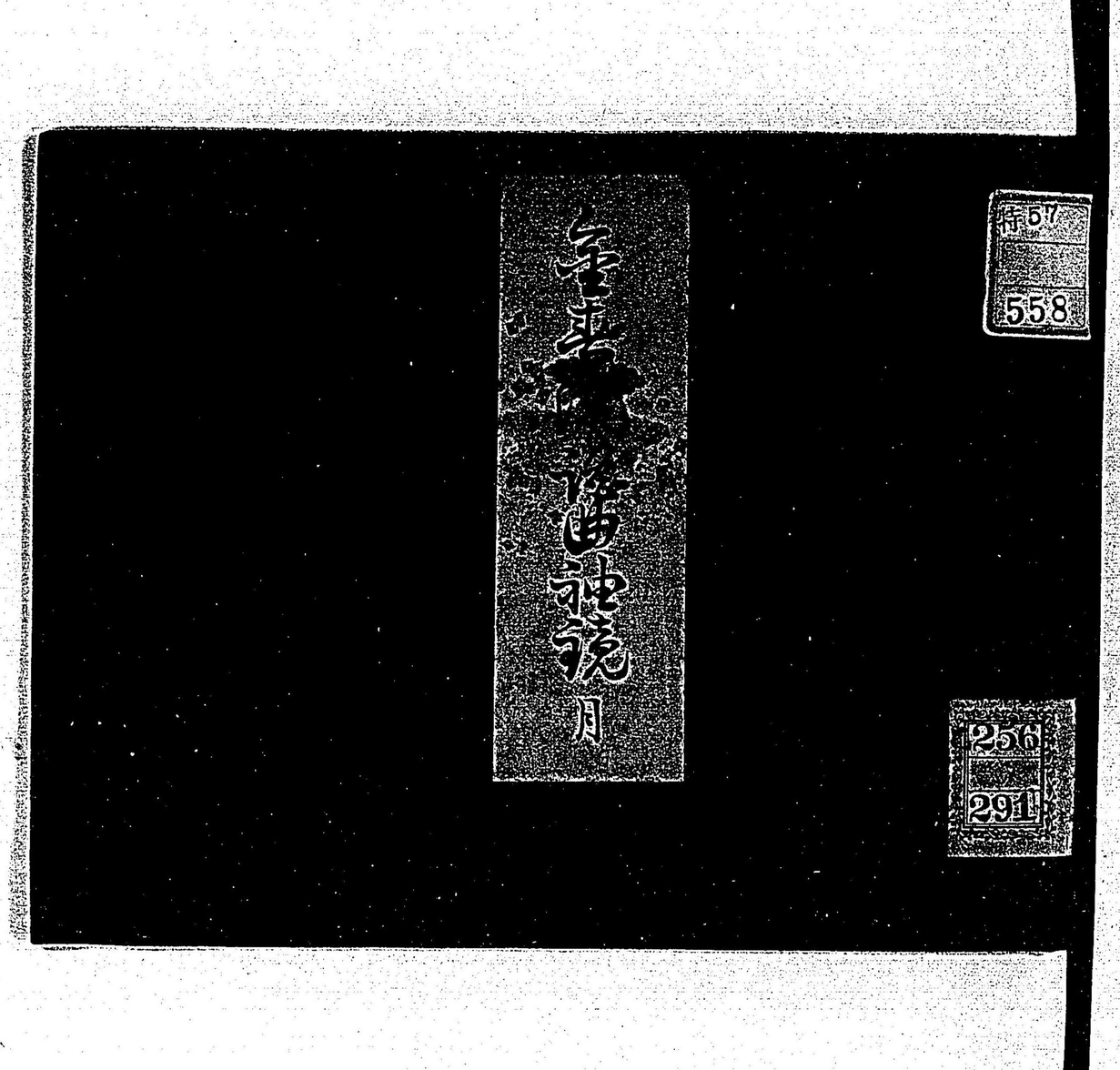
著作者　故　金春七郎

相續者　東京市芝區高輪南町五十三番地　金春榮次

發行者　東京市日本橋區通四丁目八番地　江島伊兵

印刷者　東京市神田區皆川町二番地　田村茂太郎

印刷所　東京市神田區皆川町二番地　田村印刷所



074990-001-5

特57-558

金春流謡曲袖鏡

金春　七郎／著

M45

CEL-0912